

宗教心は最も健全なる常識なり……………近角常観……………(1)

念仏の余韻(たのもしき)……………池山榮吉……………(4)

次 正 定 聚 の 徳……………井上善右エ門……………(8)

慈 光 日 誌 抄……………西元宗助……………(11)

目 <sup>67.7.28</sup> か ぎ り な き 大 悲……………木村義文……………(15)

続・念 仏 詩 抄……………木村無相……………(19)

歎異抄に導かれて(三)……………花田正夫……………(21)

# 慈光

第三十七卷 第十号



# 宗教心は最も健全なる常識なり

近角常観

宗教心とか、宗教意識とか名付けるときは、常識以外の精神作用であるかの如く考える習慣がある。これが抑々根本的に誤謬である。故に信仰とか宗教とかいう時は、世人は忽ち常識を逸したるものと考えている。何か不思議な、寧ろ奇怪な精神現象と予定している。所謂廓然大悟とか信心廻向とか、インスピレーションとか云う、常識で測るべからざる精神状態であると思つてゐる。特に燃ゆるが如き信仰とか、狂気の如き熱情といえは、寧ろ常識以外でなくてはならぬといふことは、信仰状態の一要件の如く考えられる。故に熱心に信仰を求めるときは、通常では満足出来ぬ。出来るものなら不思議な目に遇つてみたい、奇蹟でも夢みたいという妄想を抱く様になる。それ故、世人は所謂宗教心を以て病的であると言つ様になるが、ただに世人が言つばかりでなく、信者自身も病的の如き状態に陥らねば宗教意識でないと考えてくる。畢竟精神を一点に集注して、他を顧みず、狂気の如く、炎の如くならねば、真実の信仰

とは云われぬと考ふる、要するに常識を離れたものならざるべからずと考ふる事になる。  
果して信仰がこの如きものならば、頗る不健全である。私は考ふるに、宗教心は此の如き奇怪なものではない。寧ろ最も健全なる常識に外ならず、と思ふ。全体宗教を以て神聖なるものと考ふるのはよいが、その極、遂に人間の企て及ばないもの様に考ふるのは、非常な過失である。もしその様であれば宗教ではない。抑々すでに宗教と云えば仏と人との融和を意味するものである。既に仏と人との融和なれば、人として其の常識に訴え、人として其の性質に叶うものでなくてはならぬ。若し常規を逸し常識を脱するものなれば、吾人人生界の上に存する宗教とは名付けられぬ。若し常規を逸したるときは、或は超越的であると考えられることも出来る。然しその超越なるものが、人間と云うものを標準として考ふるときは、常人としての性質を逸したものであつて、所謂病的と云わなければならぬ。私は考へ

阿羅漢問答の折、阿羅漢が哲學的論議を弄して、

るに、宗教は人間の人間たる真髓を現わしたものである。随つて所謂宗教心なるものは吾人の常識が最も健全に発達したものである。即ち各自その宗教意識を自省してみるに、たとえ如何なる様子に現われていても、決して常識を脱するものではない。寧ろ常識として最も健全なものにして、宗教心は模範的の常識である。随つて宗教は模範的の人間界を現わしたものである。常規を逸したるが宗教の一要件でなくて、寧ろ常規を逸せぬことが一要件である。これが人間として仏陀に融合した味である。然るに、宗教上に於いて開宗者の伝記を見ると、殆んど常識以外の事蹟が現われている。釈尊が老・病・死を見て、非常の感起され、儲位に在つて夜に乘じて、王宮を遁れ、山に入られたるが如き、如何にも常識を以て想像す可らざる事がある。ルーテルが野外を逍遙して突然同行の友人が電光のために打たれたとき、天の起せる恐怖により法科大学在学中でありながら、早速寺院に入り僧侶となり、非常な憂鬱に沈んで懺悔を事としたが如き、決して通常ではない。されど、此等は何れも最も真摯なる行為であつて、即ち自己が感じたるべき、忽ち行為に現われて、その間一髪を容れる余地がないのである。而して釈尊が所謂十二年の間、諸種の宗教的經驗を積み重ねられた時、その心中は頗る苦悶されたものとみえる。その精神界裡の煩悶の様子は、こ

れ又確かに常識を以て推すべからざる有様である。釈尊と阿羅漢と問答の折、阿羅漢が哲學的論議を弄して、釈尊に對して抗弁的態度をとつた時、釈尊は答えられるには、我は我が心中の苦惱を解脱せんがために遠く来りて教を請うので、恰も病人の医療を求めぬ如く切なものである。左様な戲論のためではないとて、即座に去られた。実に信仰の問題について議論的態度をとる者のためには拳々服膺すべき訓戒である。さてこの苦悶の最後に、遂に精神的妄想、即ち悪魔を勤絶して所謂廓然大悟の樂境に達せられたのである。この安心の地に達せんとする前駆として、非常な精神上の苦悶がある。これを若し平生悠々閑々として、戲論をなして、呑気にして居る者の目よりみるときは、如何にも狂気の如くあるのである。常識を逸した行動と見えるのである。この苦悶が中々通常でないものである。釈尊が自ら病者が医療を求めぬ如しと形容されたは、如何にも適切な形容である。されど、全くこれ真摯な人ならばかくならねばならぬ道理であつて、所謂頭然を払うが如く一刻も猶予する余裕がある筈がない。されど常規を逸した意識ではない。殊に宗教心と称すべき点はこの煩悶ではない。この煩悶を脱して後、從容迫らざる広廓な精神界である。この境に至つてその胸中に起る宗教意識は最も常識と異なるものでない。寧ろ最も健全なる常識にして、人間意識の標本とて



「モーゲンのセントの極聖者の夢」(1766) はその神祕説に対する批判である

モヘット  
570 ↓ 632 (6.8)  
1772  
1688

Suedensborly  
1744年の宗教的イデオロギイ、以てその影響を及ぼす  
1744年の宗教的イデオロギイ、以てその影響を及ぼす  
1744年の宗教的イデオロギイ、以てその影響を及ぼす

も称すべきものである。

しかしこの苦悶の時の意識については、大いに注意すべきものがある。動もすれば、殆んど常識を逸したかの如くみえる人がある。マホメットやスウィーデンボルグの如きは頗る怪しい。今日にても、宗教心より遂に罪惡思想に陥り、或は種々の迷信を抱く人がある。是れも最も注意すべき点である。この苦悶の時、常識を逸してはならぬ。既にこの苦悶の時常識を逸せずして、治えあげたもの故、その結果が健全なる常識として現われるのである。各自らその経験に徴して省みるがよい。私は最も嬉しいのは、自分の欠点のあることを自覚する意識を生ずる様になったことである。而して中に得意になることもあるが、忽ち自己の欠点や頭をもたげて来るために、高慢の心を碎かれる。ここに自ら慚愧の心が起り、他人の欠点は左程目につかぬ。殊に自分の怠慢、冷酷なことを感ずれば、仏陀の寛大なる慈悲深き心が一入感ぜらるる。即ち感謝の念が起る、そうすれば安閑としていらぬ。出来るだけ同朋のために尽くさねばならぬ、宗教のため尽くさねばならぬという心になって真剣になる。所が、中々心に思うばかりで実際は尽くされぬ。少々位善をしても實際は為したと称する程のことはないのである。この様な心が私の現今宗教意識の有様である。頗る微弱なものであるが、自己の悪を照らし出され、自己の

### 念仏の余韻 (たのもしさ)

「念仏申し候へども踊躍歡喜の心疎に候ふこと、またいそぎ浄土へ参りたき心の候はぬは如何にと候ふべきことにて候ふやらん」と申し候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にてありけり。よく／＼案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ「往生は一定」と思ひたまふべきなり。よろこぶべき心を抑へてよろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしるしめして「煩惱具足の凡夫」と仰せられたることなれば、「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」と知られて、いよ／＼頼もしくおぼゆるなり。

### 池山榮吉

思へども娑婆の縁つきて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり、いそぎ参りたき心なき者をことに憫みたまふなり。これにつけてこそいよ／＼大悲大願は頼もしく往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へも参りたく候はんには、「煩惱の無きやらん」とあやししく候ひなまし」と云々。

唯円房の恐れたところは、大してよろこべもしないのは信仰のしつかりしていない証拠ではあるまいか。念仏はとなえていながらも、さしたるよろこびも伴わないのは、どうも自分の信仰がいいかげんなもの所の為ではなからうか。こうした懸念があつたのであります。この点については、大方皆さんの御手許にゆき渡っているだろうと思われる。パフレット「桧舞台に呼び上げられて」の中に、述べておきました。要するに百尺竿頭一步を進める心地で、一つ

——信仰の余瀝より——

きり  
きり(地出)

また浄土へいそぎ参りたき心の無くて、いささか所勞のこともあれば、死なんざるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり、久遠劫より今まで流転せる苦惱の旧里は棄て難く、未だ生れざる安養の浄土は恐しからず候ふこと、まことによく／＼煩惱の興盛に候ふにこそ。名残り惜しく



間違えば顛落を招来するであろうところの信仰上の生死を賭けて、思い切つて打ち出した唯田房の「如何にと候ふべきことにて候ふやらん」どうしたものでございましょうとの唯田房のお尋ねに対して聖人はいきなり、あ、そのことか、そのことなら調査済みといった調子で、しまつてある書付を取り出して目の前に掲げでもするかのように、恐らく満面会心の笑みをたたえつつお答えになつたのが「喜ばぬにて、いよ／＼往生は一定と思ひたまふべきなり」よろこべないから、なおさら御たすけに間違いないと思つがよいというのである。実に快刀乱麻を断つ底の切れ味である。これしき、よろこばしきの情念を信仰上必具の簡条から取除けて了つたのである。信仰にはうれしさよろこばしきの「感」が伴わなくては嘘だよとあるのが当り前だと思われれる命題を、なにそんなことはないよと綺麗さっぱり否定してしまつたのである。随分思い切つた、凄いというもおろかなる断案である。

「よろこばぬにて」これが九章の要であり、焦点である。この言葉一つが九章全体を貫き綴つてゐる。この言葉が先駆けとなつて、その後から「よろこぶべき心を抑へてよろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして」云々と、歩武肅々、同勢拳つて繰り出すという段取りになつてゐる。

あぶねかなこころ、  
おぼろかにうしろした

らは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願を起したまふ本意、悪人成仏のためなれば」とあるのを指すので、これをここへはめると、寸分のすきまもなく、しつくり納まりがつくのです。すなわち「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば——換言すれば、煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば——他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」云々と読めて、大方意味も通り、言葉も備わるように思われます。

「かくの如きのわれらがためなりけり」この言葉は「念仏申さんとおもひたつ心」であり、信仰獲得の合言葉である。銘々の信仰は口に出して言おうが、言うまいが、この言葉で決りがつくのである。この言葉のきこえないところに信仰はない。信仰とは、この言葉に包まれている気持、つまり他力とはどんなものかという心証、諦認、すなわち諦かに知ることをいうに外ならない。

聖人が「好き人の仰せを被りて信ずるほかに別の仔細なきなり」と仰しやう。その信ずるとは、何をどう信ずるのか、それは即ち「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」と諦認するのである。念仏はその諦認の表現

二言 信を獲てはよろこぶべし、  
あぶねかなこころ、おぼろかにうしろした

信仰がないなら、よろこべないのが当然で、よしよろこべたと思つたことがあるにしても、それはほんの一時の幻想で、やがては雲散霧消してしまつても何の不思議もない。蓮如上人も言われたように「たとへば糸にて物を縫ふに、そのままに縫へばぬけさふらふように」で、信の結目がない糸なら、いつかすっぽぬけて了つても苦情は言えない。だが信仰がある以上は、よろこべるのが当然で、いつもそうありそうなものだが、そこがよろこばしきの気まぐれの性の浅ましき、そうならないがちなんだから始末がわるい。聖人が「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥づべし傷むべし」と嘆かれたのもここですな。だのに「しかるに仏かねてしろしめして」である。「煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」である。「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」であるのである。

ここで一寸気になるのは、「煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」の一句である。このままであらましわかることはわかるが、遠慮なく言えば、何だかすこし字足らずで、かゆい所へ手がとどきかねる憾みがないでもない。

ところが、ここへ第三章の文句をかりてきて当てがってみると、丁度よくはまるのです。それは「煩惱具足のわれとも見られる。前掲の聖人の御持言はこの意味の念仏の和訳である。「弥陀の五劫恩惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」この御持言と、今問題になつてゐる「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」と比較して御覽なさい。結局全く同じことではありませんか。

前者は後者を敷衍したとも見られるし、後者は前者を更に簡約化したものと見て差支えない。とすると、前に述べた通り、前者即ち御持言にたのもしきの念がつきまとして離れないなら、後者即ち「かくの如きのわれらがためなりけり」も、たのもしきの雰囲氣に包まれるものと推断しなくてはならない。この見込みは間違いないと思う。ところが果せるかな——というのも確かにあるのを見届けてから、仰山に予言的に言いふらす嫌があつて、ちと可笑しいが——聖人はこの言葉につづけて「と知られていよ／＼たのもしくおぼゆるなり」と言つていられる。ここに至つてかの見込みのあやまりないことが聖人の御言葉によつて立証されたともいえよう。だから仮にもあやまつて、御持言の終り「本願のかたじけなきよ」とあるそのかたじけなきよを、たのもしきよと読み違えたとしても、意味の上からは大同小異、外に向いた表と、内に向いた裏との違いで、物は一



つと言つてよいと思う。

よろこびは信仰の必要箇条でないと言つて一応安心はするものの、信仰があつてもよろこびというにぎやかな情緒が伴わないとすると、何だか物足らない。見渡せば花も紅葉もなかりけり、では、うらのとまやでなくても寂しくてやりきれない。が、案じたものではない、よろこばしさのかわりにその姉妹感のたのもしさが、いつのまにか傍に控えている。そればかりか、たのもしさのいるところには、姉妹だもの、よろこばしさも時々顔を見せずにはいない。実をいうとこの喜ばしさ、あてにならない浮気者とは知りながらも、自然に具わる魅力のすばらしさ、可愛いことはやっぱり可愛い。その愛嬌者の訪れも、期待出来るとは、まことに願つたり叶つたりで、柳の枝に桜の花を咲かせるようなもの、両手に花とは正にこのことである。たのもしさ、それは煩惱にまがけるこちらの態度いかにか、わらず、どこへまでも見捨てない向うの意志の力である。その力への諦認の半面であり、不退転位の感応である。たのもしさ、それは単なる言葉であつてはならない。綿々<sup>わたわた</sup>として尽きない余韻、念仏の余韻でなくてはならない。どうぞこの辺のところを篤とお味わい下さつて、聖人の仰しやつた、たのもしさ、を単なる言葉として聞き流さず、信仰の基調、念仏の余韻として実感されるよう、切

心をとらるゝ  
ついでに  
ある  
918  
大抵の  
心をとらるゝ

### 正定聚の徳

本年は白井成允先生の十三回忌を八月に迎えました。先生の詩「招喚の声」に

身は娑婆にありつ、も  
既に浄土の光耀を蒙る

という一節があります。現在只今、浄土の光耀がこの身に至り及んでいるよろこびを詠われているのですが、その大いなる恵みはそのまま正定聚の益におさまるものでありましょう。親鸞聖人は正定聚の益を現生十種の信の益として展開し讃仰しておられますが、その心光常護の益が今浄土の光耀と一つになつてた、えられていると感じられます。一昨年来私は「末灯鈔」の拝読所感を「真人」誌に書かせてもらいつつ、如何に晩年の聖人が正定聚の徳益を深い感動をもつて語り告げられているかに感<sup>かん</sup>を新<sup>あらた</sup>にしているのです。その徳を「如来に等し」とも「弥勒に同じ」ともたたえられ、これを誤解する関東の門弟達に懇々と慈戒を

をお願いしておきます。

(ありそなこと・南無阿弥陀仏より抄出)

### 弔歌 白杵祖山

われやさき人やさきなる世の中に変らぬ慈悲にすくわれ  
てゆく

身はたとひあしたの露と消えぬともころは永久に華の  
うてなに

いかにせんすべもなき身をひとすじにとほるみのりにつ  
らぬかれぬる

ゆく君をおくるころもあはれなれ我やさきなる身とも  
しらずに

南無阿弥陀仏

### 井上善右エ門

垂れておられるのであります。

真宗の教学で現益と当益といふことが談じられます。浄土に往生して得る真如法性の覚証を当益といふ、現在世において得る信の徳益を現益といふのですが、いかにもこの二益を混同することは許されません。しかしまた現益と当益とは截然と扉で仕切られたようなものではないと思つてです。その底には一つの法水が流れている、底が通うている、そういう感じがするのです。当益の風が現生に吹き込むとでもいう趣きが現生十種の至徳具足とか、転悪成善とか心光常護とか常行大悲とか申されている益に感じられます。信さればこそ信巻の初に往相廻向の深信を掲げて「真如一実の信海なり」と宣せられているのでしよう。  
「真如一実の信海」とはまことに容易ならぬ言葉といわねばなりません。この信の一念にたまわる正定聚の徳を、ただ往生の定まった状態という意味だけで止めて、そこに浴する徳を生活の中に味い体することを忘れる傾向のあつ



たところに、浄土の教えが「あの世だのみ」と批判されるようにもなつたのではないかと反省されます。念仏しながら放逸無慚とか造悪無碍の淵に顛落することのあるのも、この事と無関係ではありませんまい。聖人のお手紙にはその事を何よりも悲しみ傷まれています。

「至徳具足の益」という文字を拝すると、この私が忝けなくも底しれぬ如来徳につながりつづけている身であることが思われます。それはそのまま攝取光中に今あることでもありますし、それがまた才市さんの口をついて「慚愧歡喜のナムアマミダブツ」と発露したのであります。徳は即ち智恵であり、智恵は光として実感されるものであります。白井先生の遺詠、

いつの日に死なんもよしや弥陀仏のみ光のなかの御いのちなり

とうたわれたところには現に只今、弥陀仏のみ光によって生死の根本問題が未徹つて解決され、如来の御いのちをたまわつて生きる大いなる安らいが生々と感じられます。又弥陀仏のみちかひゆえに天地のおのづからなる救け

さに入る

という一首には、われ／＼の計いや思案や反省ではどうにもならぬ人生苦が、如来の智恵と慈悲の御誓に遇つて奇しき寂靜の統一世界に攝め取られゆく様子があり／＼と感じ

られるのであります。

そうしたころを巧に語られた言葉があります。存覚上人が「浄土真要鈔」の中で、文類正信偈に聖人が「必ず無上浄信の暁にいたれば、三有生死の雲晴れ、清浄無碍の光耀朗にして、一如法界の真身顕はる」と誦されているのを釈されて「寂滅無為の一理をひそかに証す」といわれているのは非常に意味深長な含蓄ある言葉だと感じます。煩惱と業縛に障えられているこの身に寂滅の理は到底証するによしなきものでありますけれども、真如より顕われた光明と名号の徳に浴し、おのづから天地の寂けさに攝められて念仏申すときの有難さを示されたものではありますまいか。

転悪成善ということも、まさに至徳具足、心光常護の故に顕現する深い転成の妙趣を指しておられます。本典総序の文には「悪を転じて徳と成す正智」というお言葉がありますが、そこでは畢竟じて煩惱の水が菩提の水と転ぜられる救済の全貌が示されており、その徳が今生に流れ込んで人生における転悪成善の現益となつてあらわれるのであります。罪障功徳の体となる」といわれ「さわりおほきに徳おほし」と和讃にうたわれています。何という深い言葉でありますか。この人生に悲痛多いことは言うまでもありません。しかしその悲痛事に埋没し闇黒に彷徨することに何の意味がありますか。その罪障の悲痛をみ

偈はれるのです。

(昭和六十年八月末日)

歌集 波岡茂輝

一人あらば二人と思へと訓へたまふ祖師の御言葉  
尊きるかも

我がごとき思ひあがれるさかしらを助けたまはむ  
弘誓なりしか

日輪はたださんさんと輝けり樹にこそ暗き蔭はありけれ  
源の濁れる川もひたすらに海にそそぎておのづから澄む  
何事か成し得べしとの夢さめてあやまり果てし  
後に道あり

三三

そなはせばこそ大悲が結晶して南無阿弥陀仏となつて今この私と共にまします。わが胸の中を知りとうして下さるみ親にお値いするとき、はじめて人間のやるせなさは融かされます。悲痛な人生を縁として如来の徳をこの身に頂戴することこそ人間と生れた意味であり、無碍の真実を味わせていただく所以でもありましよう。

さらに常行大悲の益ともなると、最早やわれ／＼の思いや意識を超えた徳の働きといわねばなりません。御一代聞書にある一条をいただいて、不思議の徳の輝きを偲ぶばかりです。云く。

信心治定の人は誰によらず、先づ見ればすなはちたふとくなり候。是れ其の人のたふとくに非ず仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有難き程を存すべき事なり。

この事は、よき人に遇つて誰もが実感するところの奇しき事実であると申す外ありません。仏智が法爾としてその人の信心の中に現われる、これはその人自身には気づくことのない仏智そのもの、働きてあり、顕現であります。このような徳をたまわる身の勿体なきを思うとき、うか／＼とはしておれません。念仏は無限なる如来の御いのちにつながつており、信心における「永遠の黎明」ということもそこから促され催されてくるおうけなき出来事であることが

おかげのふたつを  
なすり花しのを  
おかげのふたつを  
なすり花しのを



# 慈光日誌抄

われ・生けるしるしあり

西元宗助

昭和五年  
この夏は室内の温度計でさえ、連日三十一度を越える暑さで、クーラーをつけても、ときには堪えがたい思いをした。しかし、お蔭さまで、その中を、西に行ったり東にいったりさせていただく。まことに本願の念仏によって、われ「生けるしるしあり」でありました。しかし又、そのなかに悲しいことの数々にも。

八月八日には、アメリカで約五十年余、開教使をされて昨冬帰国の赤星真月師夫人房子さんの告別式が、大阪府下狭山町の令息宅であった。アメリカ在住の二世、三世の房子さんたちも馳せ参じ、その中には娘ムコの九条英淳開教使（シカゴ仏教会）の顔も見え、十三年振りに固い握手をする。

お導師は経谷芳隆師（龍大講師）、弔辞代表は平林暁裕師（元津村別院輪番）、追弔法話は松本徹照師（元鹿兒島別院輪番）、このお二人は赤星師と共に、在米開教使として戦時中も、アメリカの奥地のロケーション（戦時抑留所）で苦難

の生活をなさった仲間である。式にはアメリカの仏教会本部の山岡誓源開教総長はじめ、各方面からの弔電の披露があり、次いでピアノの伴奏で讃仏歌「み仏に抱かれて」と「恩徳讃」の斉唱があり、その間に焼香。最後に喪主赤星師のしみじみとしたご挨拶があった。わたしは、ありし日の房子夫人の面影、殊にハワイ滞在中、手料理のご馳走になったことなど、あれこれと想い出す。

ともあれ、告別式の雰囲気とありかたは、アメリカ及びハワイにおけるそれと全く同じで、十数年前の滞米中のことが、あれこれと回想された。殊に前記「み仏に抱かれて」は日本では殆んど唱われぬ歌であるから、参考までに、その歌詞の(一)と(四)を左に掲げる。

み仏に抱かれて

君逝きぬ 西の岸  
懐かしき 佛も

小谷政雄（ロスアンゼルス、柴田榮信（リードレイ）等。そのご縁もあって、赤星兄弟が開教使になることを断念して、前記イングリッシュ・センターを開設してからも、同センターで約四年間、佐々木正典君と共に歎異抄を中心に仏教講話をさせていただく。

八月二十二日、朝から温度計は三十五度。この日、まず北海道洞爺湖畔の皇恩寺（虻田町）の住職・増山顕恵師来宅。顕恵さんはアメリカ開教の基盤をきづいた故増山顕珠先生（一九三〇年から一九三八年まで開教総長、帰国後京都女子大及び龍谷大長歴任）の甥御で、顕珠師の御自坊を継ぐ。

この七月上旬、北海道で初めてお目にかかった方であるが、どういふものかウマがあう。お会いするなり、「どうしたら第十八願の本願海に」と、お尋ねになる。必死の相である。よって私、そくぎに「今現に第十九願乃至二十願にさまよえる、どうしようもないわが身であることに気づかせていただくことが大事。ナンマンダブツ」と果遂の誓いを讃嘆すると、顕恵先生、深く肯すかれる。

ともあれ、快僧であり豪傑である。すこしもお坊様らしくないところもよい。それでいて、どこか故増山顕珠先生そっくりの親分肌で、拙宅につくなり、ビールなどより焼酎がよいとご所望なさる。さっそく家妻が用意すると、ご



気げんよく歓談がはずむ。

但し、この日は、洛西の故白井成允先生宅で午後三時から、先生の十三回忌法要の営まれることになっている、その定刻も近づく。もう、こうなれば致し方がない。はるばる訪ねてみえた遠来の珍客を家内に任せ、タクシイに乗って、浄住寺の傍の先生宅に参る。

すでに浄住寺住職の榊原徳草老師お導師のもと、阿弥陀経の読経がはじまっていた。集るもの、白井先生ご遺族の方々をはじめ、旧「自照」同人の井上善右衛門、中井玄英、日野大心の諸兄に故佐々木徹真兄夫人。そして金治勇兄、(国際仏教大学名誉教授)等。

わたしが親しく白井先生の尊容を拝したのは昭和十二年七月、大分県由布院における渾沌社主催の法隆寺・佐伯定胤師の『成唯識論』のご講筵(八日間)においてであった。わたしはこのとき、福島政雄先生や柳川重行氏らと共に、渾沌社同人として裏方をつとめる。そして白井先生のほかにも、定胤猊下のお弟子白杵祖山師らにお目にかかれたのは有難いことであった。

白井先生のお言葉で、今もなお耳に残っているのは、歎異抄後序の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに云々」のお言葉の中で、一番大事なのは、頭初の「煩

我儘の限りつくせし我をだに よき子と  
告らしし母逝きましぬ

いまは成徳さんも、そのご両親も、俱会一処のお浄土と想うと、まことに有難い。いや、福島政雄先生も藤秀璣先生も定利浄田先生も近角常親先生も、金子大栄先生も、みんなご一緒かと思つと、ほんとうに有難い。

最後に、八月二十四日、西下して大分県豊前市の浄田寺さまに詣り、ここが濟世軍の真田増丸先生ご出生のお寺であるご縁で、東陽円月、円成両和上、および白杵祖山先生の御一族のかたぐいにもお会いでき、午前、午後にわたつて沢山の参詣客と勝縁にあいえた喜びを記したいが、ひとまず以上でペンをおくことにする。

(昭和六十年九月三日)



14.12

惱具足の凡夫」ということ、そして「煩惱具足の凡夫」とは、わが身のことと知らせていただくこと、それが「ただ念仏のみぞまことにしておはします」と仰せのお言葉の奥底にあるもの(註・機の深信)と、じゅんじゅんとお説きになったことは、今もなお、わが身にのこる。

しかし、白井成允先生のことを想えば、ただ「慚愧」。なお、先生の御長男成徳さんとは、昭和十五年三月、当時、広島文理科大学教授であられた福島政雄先生宅にてお目にかかる。成徳さんは当時、仙台第二高等学校の学生。約一時間半ほど太田川畔で、あれこれと話したが、これほど清纯にして重厚な青年はいまだ知らない。戦時中忠召となり、シベリアに抑留中、死去されたという、先生の断腸の悲愁は、その歌集『青蓮華』によっても深く拝察される。

夢さめてきく汽車の音に去にし子の  
帰り来ずやと胸乱るるも

なお、この『青蓮華』には、成徳さんが、母君を失われたときの悲しみの歌が七首、載せられている、その中の一首を左に、

耳 順 筑紫野春草

ことごとくに怒り腹立つわが癖の変ることなし耳順の齡に  
今やうやく祖父等の嘆きうべなはる命長ければ恥多しと  
よしなごと思ひそ言ひそ障るぞといたはりませしたらち  
ねの母

召喚の声の外には道なしと一蓮院の言のよろしき  
額 1788 成徳 1860 藤秀 1860 藤秀 1860

頑 固

そうですかと素直に受くることのない一言居士か我も然れど  
己れ正し清しときめてゐることく忠言を聞かず我も然れど

うなづきて聞きあるものの如くして少しも聞きあらず我も然れど



# かぎりなき大悲



木村 義文

## 声のひびき

ある仏教雑誌に、琴の名手、盲目の宮城道雄氏の随想、「水の味」の一部が紹介されました。原文はまだ拝見しませんが、それはこうであります。……「どんな美しい人にお会いしても、私はその姿を見ることができませんが、その方の性格を知ることができます。美しい心根のお方の心の調べは、そのまま声に美しくひびいてくるからです。声のよしあしではありません。雰囲気と申しますか、声の感じですね……琴の音色も同じことで弾ずる人の性格がはっきりと、そのまゝ糸の調べに生きてまいります。心のあり方こそ大切だと思います云々」といっていられるのであります。

「言葉はこころの生命だ」ということを聞いたことがあります。言葉はこころの生命だ、いまさらのように思うのであります。

お目出とうと口々にお祝いの言葉をいうてはいるけれど、内心には妬みの心が隠されていて、必ずしも喜んではいないことを、鋭い耳でききとらえているのです。

言葉というものはほんとうに恐ろしいものです。口ではどんな綺麗ごとを云っていても、その言葉から流れ出る感じが、その人の本心を告白してかくすことがないとわかります。

わたしは宮城氏のようなお説をきくと、ナムアマタブツというお念仏のことが思われてなりはせん。お念仏を称えても意味がない、つまらぬ、という人があります。お念仏は本当に意味もなくつまらぬものでありましょか。私は、お念仏はつまらぬという人にきいてみたい。あなたは本当にお念仏をお称えになっておられますか——と。本願を信じてお念仏を申しておられますか。

申すまでもなく、お念仏は如来のご本願をあらわすお言葉です。大悲の呼び声です。声は聞くものです。宮城氏のいわれるように、声には音色があります、感じがあります。その音色、感じは聞くよりほかに受けとめようのない世界です。お念仏の音色もそうであります。きくよりほかに、お念仏の音色はうけとりようがないのです。

念仏せよとの仰せは、お念仏を称えつ、仏様の「助けず

宮城氏はまたこのようなこともいつておられます。人々が悲しみあう声や聞くと陽の音調がする。人々が喜びあう声をきくと陰の音調がする」と。

わたしは、たまたま「やわらかな心」(吉野秀雄氏稿)に、盤珪国師(一六二一—一六九三)在世のころ、姫路に、ひとの音声をきいて、その心事をさとの盲人の天才がいて常に、

「賀詞はかならず愁いのひびきを帯び、弔詞はかならず喜びのひびきがこもる」といつていたという話を紹介されていたのを読んで感じたことは、盲人のかたは、目でものをみる事ができないかわりに、耳の働きはすばらしいものだ、ということを知っており、

鋭い感覚をおもちなのであろうということであり、また格別に人々が悲しみあう声をきくと、語る言葉は悲しみをあらわす言葉ではあるが、心のなかではすこしもお気の毒とも悲しいとも思っていない。また、人の祝いごとと呼ばれて、

におかんぞよ」とのおん呼び声を聞くことです。お念仏をきくということとは、お念仏を通じて十方にひびきわたるご本願の音色をきくということです。お念仏を称えてもつまらぬという人は、称えよ、ということだけを聞いて、聞くということを知らぬ、即ち本願を信ずることのない人ではないでしょうか。

お念仏とはなんですか。くだいて云えば、たよりにせよ、まちががなく救う仏であるぞ」ということでしよう。ただこれだけの言葉であります、その言葉からひびいてくる感じを聞きとらなければならぬのです。その感じとは、さきほども云いましたように、大悲の願いです。たずかるとみこみのない衆生にかけられた悲痛な仏の願いは、お念仏を通さなければわたしの胸にひびかないのであります。

わたしから云えば、ただお念仏を称え、そのお念仏をきくよりほかに、大悲にふれる道は絶対にはないのであります。だからこそお念仏が大事なのです。我が声に我が声ならぬ声をきく、どなたのお作か存じませんが、我が声ならぬ歌であります。

(仏教放送)

みとめられる——死刑囚——

水仙の残りのつぼみ 咲くまでは



水代えてやりぬ 獄窓の日向に

この手もて人を殺めし死囚われ

これは島秋人の歌である。本名を千葉寛といひ、今から五年前「遺愛集」という歌集を遺して、多くの助命運動にもかゝらず、断頭台の露と消えた三十三歳の青年のことである。

彼の生い立ちをきくと、不幸な家庭に育ち、満洲からひきあげて間もなく、母親は結核でたおれ、本人も結核やカリエスにかゝつたこともある。小学校の成績は下の下で、みなから馬鹿にされる境遇にあつた。そうしたことが彼を転落の生活に追いやり、少年院に収容される始末であつた。そしてある日、飢餓にせまられ農家に押し入り、主婦を締め殺し死刑囚となり獄につながれていた。その頃の作がさきの歌である。

私はこれらの歌を口ずさんでいると、なんともいへぬ感慨が身にしみる。低能といわれ、而も不良で病氣もち、そういう名もない一青年死刑囚が、死をみつめながら、作歌を通じて、このような澄みきつた心境に達したかという驚きからでもあろう。

のことは悲しみにも云える。悲しみが悲しみにあう。これが本当の情を同じくする(同情する)ことであらう。

みとめられるということは、言葉をかえれば、救われるということではないか。浄土真宗の救いは、棚からボタ餅式の恩寵というのではない。救いとは、大いなるものにもみとめられるということである。だれ一人としてみとめてくれぬ自分を、アミタ如来のみがみとめてくださったと知る感銘が、救いということである。その感銘の最上級の讃辞が、「弥陀の五劫恩惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」(歎異抄)という聖人の常の仰せであつた。

かくて、わたしはおもう。私にこの感激のないのは何故か——と。再びおもう。み仏をほんとうにおがんでいないからだ、と。省みて慚愧に堪えぬ。「されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」でございます。



入所後、彼はよき師(歌の)よき友に恵まれたが、彼の

人間革命の根源は「自分はみとめられた」という一点にあつたと思われる。それは周囲のものが馬鹿あつかいするなかに、吉田好達という図画の先生が、絵は下手くそだが構図がいいとほめてくれたこと、母親が病氣ゆえに休学届にきて、先生から慰め励まされて泣きながら帰つたときの嬉しさは、終生忘れることができなかつたと追憶しているが、先生からみとめられたことがどんなに嬉しかったか。

「ほめられしことくりかえし憶いつつ  
幸多き死刑囚と悟りぬ」

と、よんだ心境からも察せられる。

これはきわめて些細なできごとのようなのだが、人間関係にあつては、これほど嬉しいことはないであらう。

先日、キヤストバレー在住の米倉久枝女史から近著、「松の木とともに」という詩集を贈られた。パラパラと頁をめくっていると、たま／＼嬉しさがあなたの嬉しさに逢いにきました(叙勲梨田夫人)という句が目にとまつた。

法悦抄

清水凡禿

秋

木枯らしに吹きのこさ

身みの程ほどを知らぬ案山子あんざんこの役目かな

又来たか亡き児をさそふ赤とんぼ

心なき風に枯葉の乱舞かな

法を説く驕慢の身を月に愧づ

案山子にも驚く人の世の狭さ

妙法をここにも聞くや虫の声

お冥加や唯うけ行かん菊の露

大船に身をば委せて長閑かな



続・念仏詩抄

木村無相

なつてはならぬ

和上(禿頭誠和上)おおせに

無明の大夜

無明長夜の

まっただ中で

すこしワケが

わかれば

はや光明

放つような

気になつて

空中を飛び

人を見下す

神通力を

得たように

なつてはならぬ

高月町 円行 禿頭

わかつたというは

わかつたにあらず

どこまでいつても

わからぬ身ぞと

知らせたまうが

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せが仏法

和上おおせに

信ずるとは

仰せを

六字が仏法

和上おおせに

大海嘯に

のこるものは

天上の月一輪

仰せが 仏法なり

聞いた心が

仏法ではない

聞いた心は 凡夫の心

ナムアミダブツが

天上の月一輪

ナムアミダブツが

如来の仰せ

仰せが

仏法 六字が

仏法

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ



# 歎異抄に導かれて(三)

悪人正機の本願

善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや。この條一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのみころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は、とおほせさふらひき。と云々。

法然上人の仰せ

「善人をほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」とは、

実態をよく知悉された弥陀仏は、その永劫かけて浮かぶ瀨のないことを悲憫して下さり、我々はおたすけを求めようともしないのに、不請の友となつて攝取とげずばやまじと本願を建立して下さつたのである。所謂悪人正機の本願である。

然し我々は幼い時から、よくなれ、賢くなれ、でない世間から捨てられるぞと、事毎に云い聞かされていゝので、この悪人正機の本願の思召しを信ずることが出来ないで、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」と律法的、相對差別の心から一般にそう思いこんでいる。

然し涅槃経に、阿闍世王が提婆のそそのかしによつて、父王を殺害したが、やがてその罪の重さに大煩悶におちた時、仏弟子の耆婆大臣が、よい哉、大王今や慚愧の心あり、必ず仏に救わるべしと励ましたが、王がかかる悪人に仏がお会い下さる筈はない、と躊躇すると、仏の大悲心を警えて、七人の子を持つ親心は平等であるが、そのうち病む子があれば、ひとえにその者のために心を砕くように、一切衆生を一子の如く慈くしまれる仏であるが、苦惱の有情をひとえに悲憫して下さるのですと、言上している。やがて大臣につき添われて仏前に詣で、その大悲の懐におさまられて、我無根の信を得たり、と慶喜している。

花田正夫

法然上人の仰せである。このことは勢観房の法然上人伝に述べてあるし、口伝鈔には「本願寺の聖人、黒谷の先徳より御相承とて如信上人仰せられて曰く」とあつて、同文の一句がある。本抄にも親鸞聖人が恩師上人から聞きとられたまを語られたのである。

さて、善人とは、声聞、縁覚、菩薩、並びに凡夫であるが善縁に恵まれた善凡夫のことで、自己の力をたのんで仏道を求める人々であつて、弥陀の本願からは傍機である。

悪人とは、五独悪世に生れた煩惱熾盛の凡夫で、悪衆生、邪見、無信の者である。然し夢中夢を知らず、狂人に病識がないように、悪人が悪人と知る力はない。夢はさめて知るようにひとり覺者の弥陀仏の御心に映ることである。

然し昔から愛は理解からと云うように、こうした我々の

蛇足ながら、この悪人正機の本願を横着に聞いて、悪くてもかまわぬと、横着な悪無碍におちる事がある。然し、悪くてもよいなどは、自分より悪人は沢山居ると云う、身勝手な予想からそう云えるので、矢張り自分は悪人であるが、まだましな人間であるという、偽装の悪人である。我執、我慢の塊の我々には、われよしの心は抜き難いのである。

このようにわれよしの心から迷路におちる者をそのままにしては救いの光はないが、ここに仏は十九願に修諸功德の願を建てられ、諸善万行を修めよ、そのようにして浄土を願う者には臨終に弥陀仏が聖衆と共に迎えて浄土の辺地に導き入れようと誓われたのである。

さて実際にその道を励む時、その至難な事に行き詰るのであるが、そこに二十願に植諸徳本の願を建てて下さつて、あらゆる善の本、徳の本である名号を称え、臨終にも狂いがなければ、夢のように仏が現われて浄土の化土に迎え、やがて眞実の報土に導き成仏せしめようとの誓願である。

これは、入学試験に失敗した者を予備校に入れて、やがて願いを成就させたいとの仏の慈悲方便の思召しである。こうしたお念力によつて、自力の心がひるがえされて、他力をたのみ心もおこるのである。



「煩惱具足の我等はいづれの行にても生死をはなるる事ごとあるべからざるを、あはれみたまひて、願をおこし一たまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」

五劫の思惟も、永劫の修行も、煩惱に障えられて、生死をはなれ得ないことをお見抜き下さって、その者をたすけ遂げずば自分も成仏しないとお誓願の成就せんがための御苦勞である。聖人の常持語に「弥陀の五劫思惟の願、ひとへに親鸞一人がため」と随喜せられ、わが身は「さればそくばくの業をもちける身」と慚愧せられている。

この事について、近角先生が繰り返されたお話の「手織りの着物」を思い浮かべる。先生が欧州留学を終えられて、日本中を遊説していられた時、お母堂の手織りの着物がとどけられた。当時もう織機も発達していたので、安価に求められるのに、わざわざ手織りして下さったことは、有難いけれど、何だか無駄な苦勞をされたようで素直に喜べなかつた。ところが先生は汗かきで洗濯を度々していると、着物がすぐ駄目になるけれど、手織りのものはいつまでも丈夫であることに気付かれ、母の苦勞はこの汗かきの乱暴者のためであつたと、そこではじめて着物を押し載かれたのであつた。

はお念仏に護られてやつと生かして貰っている」と、はてしない業苦の海を大悲の念仏に支えられての生活でした。

次に子供のある家に嫁いで苦勞したS夫人のことを近角常音先生からお聞きした。Sさんは世間から批判されまいと一生懸命につとめたが、主人までに隠れて監視せられるに及び、遂に行き詰って、お寺参りをするようになり、段々お聞かせ頂いて念仏申すようになり、どうにか生活を続けていた。ところが、近角先生の御本に、信の上から一番障りになることは、自分がよいとしていることである、とあるのについて、さて自分とはときびしく反省した時、何も取柄はないが、信心だけはとまっていることに驚き、大慚愧すると共に、それ以来信者振ることはなくなり、おだやかな信者と転じた由である。ここに自力のところがひるがえされて、ひとえに他力をたのむ人となつたのである。

更に、N市の拘置所に死刑囚として送られてきたI君がいた。彼は看板書きなどをしていたので字が上手で、教誨師の勧めで写経をはじめ、正信偈を書いているうちに、「極重悪人唯称仏」とあるところで「極重悪人とは」と聞きはじめ、やがて、念仏申すようになり、私にも会いたいのことであつた。その日が私の父の命日であつたので御縁を

長い間の思惟と御苦行を続けて建立して下さつた弥陀の本願は、煩惱具足の身とていかなる行も及び難い地獄一定の私のためである。そこに私共の實際の姿が照し出される。仏法を聞いて立派になるのでなく、いよ／＼たすかる術のない身と慚愧し、且つこの者故の御苦勞を謝すのである。

この章によって心のひらかれた日さんのことが思い出される。小学生の頃母が不縁になつて去り、継母の世話になつていたが、義理の間のむつかしさに苦しみ、時に音楽、時に運動によつて苦しみを和げようとしたが駄目であつた。大学に入った時、聖書によつて光を見出そうとしたが、敵を愛せよ、隣人を愛せよの教に行き詰り、神に祈る資格もないので絶望し、酒で憂さを忘れる、逃避生活に落ちた。

幸いにも仏縁にあい、三誓偈の「我れ無量劫において大施主となりて普くもろ／＼の貧苦を濟はずば誓いて正覚を成ぜじ」の一句に心うたれ、やがて歎異抄を繰り返しているうちに、この「いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを憐みたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば」の仰せに、親を憎み、世を呪い、我とわが身の始末のつかない者を弥陀仏はお見捨て下さらぬとは！と念仏の人となつた。其後も不幸続きであつたが、「世間にはお念仏一つで立派にやつてゆく人もあるが、僕

よろこび、面会に行くと、彼は念仏の中から「実は私の長男が今日入学しました。家内がお父さんは遠くに働きの行っていると聞かせていますので、子供は何も知りませんが、やがていつか死刑囚の子と呼ばれる時も来ましよう。それを思うとたまりませんにつけ、仏の心を知ってくれよかしと願ひ、一連の数珠をもとめて送つてやりました。」と話してくれた。彼の処刑の日も、仏前で最後の禮拜をすませ、「私は看守さんにいつも厄介かけておりますが、浄土では自由な身にさせて頂きます。今日は新生活への船出ですと、御禮を云つて刑場に消えた。

このことは業縁次第ではどうしたら業さらしをしでかすかわからぬ私共に身をもつて周到な大悲を教えてくれた尊い出来事であつた。

近角常観先生は、「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なりとは、他力をたのみたてまつりて、悪人が悪人と分つたところが正しくたすかる因である」と肝要なところを御指適下さいました。

摘

1.6.9



あ と が き

宗教心と云えば世間の常識をこえた心のよう<sup>に</sup>に考へ勝ちであるが、禪家も「柳は緑、花は紅」と提唱するように健全な常識であることを近角先生が述べていられます、反省させられますことでありませう。

池山先生は、信の上からよろこばしきは消長して不安定であるが、念仏の信には変らぬたのもしさの伴うことをお話して下さいました。攝取不捨のみ手あつて申せることでもあります。

井上先生は、白井成允先生の十三回忌に際し、恩師の信光を讃仰して下さいました。私は先生が最後の病床で、息女の明子様<sup>に</sup>「これから父を思い出したらお念仏して下さい私は念仏の中に生き続けているから」と仰言つたことをいつも思い出しております。

西元先生は赤星夫人の告別式を機に、北米の葬儀の模様を詳細に述べて下さいました。又白井先生の十三回忌法要の有様をお知らせ下さり、且つは白井先生との御縁の数々をお書き下さいました。御令息白井成徳様は戦時中、シベリヤに抑留中死去された事とて、同様にシベリヤに抑留された西元先生には感深いことでありましよう。

木村義文師は山口県に生れ、竜大卒で昭和十年以来北米開教使、現在フレスノー別院輪番『かぎりなき大悲』中から転載させて頂きました。益々御健在にて御苦労下さいませう。

すよう祈念申します。

木村無相師の『続・念仏詩抄』から念仏詩をいただき、久々に師の信徳に浴しました。

最後に、歎異抄三章の「悪人正機の本願」のころをわが身に頂戴いたしました。よしあしの相対差別の心しかない私共が、絶対の仏智、大悲に照されて、過現未にわたり虚仮不実の身と知らされ、そこに慚愧、そこに感謝させられることでもあります。

御案内

十月二十七日午後一時、京都市西京区山田開町浄住寺にて、年度の一道会が催されます。御参会の程お願い申し上げます。

十月の第三日曜二十日午後一時半、名古屋市南区駈上二丁目十四、鬼頭康彦様宅にて名古屋一道会をいたします、歎異抄の五章を中心にお話させていただきます。

定価	半年 八〇〇円(送共)	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
	一年 一六〇〇円(送共)	天野昭夫
編集・発行人	花田正夫	発行所
電話	八二局七〇三七番	名古屋市南区駈上二丁目五十五
		振替口座 名古屋 六二〇七番
		郵便番号 四一五七

**慈光社**